頭書京分和歌集遠鏡 乙

和書門
類 一八二一五
號 二の三
函 八
架 八
冊

内閣文庫

内閣文庫
番號 和 18215
冊數 8 (3)
函號 200 11

綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

古今云帖子八あきやすとあり
うべハ諾の字をあてゝきこえたり久しき言
浪ても花と見るらうたかへよりあるまじいとまうしつきぬ

頭書古今和歌集遠鏡巻第五

秋歌下

是貞のみこの家の歌合の歌　文屋康秀

吹からに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらむ

フクトスグニ、秋ノ草ヤ木ガシヲレヤウニスレバ尤ナコトヂヤ　ソレデ山ノ風ヲアラシトハ云デアラウ
○あらしハ秋のあらしといふ名は、あらしといふ詞のごとく、尤なることにて、又あらき
風とつよふいふことも
とも、いふとそへ

草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける

○清清

浅草文庫

ハつとおどろきてよむ
ごーとぎろくことよ
むべうつれるとつゞく
とまづいへるにの
うたとの帆子なる
およしく朝康え

常盤の山ていふ
山城にありといへど
こゝなるハたゞいふにて
常盤木の多くある
山のよしなるべし

草木デモ何デモ　此秋ト云時節ガアツテ　ミナ色ガカハツテ枯テシマウケレドモ　アノ海ノ浪ノ花バツカリガ　イツデモ同シヤウニ咲テ　秋ト云コトガナイワイ

秋の歌合しける時によめる

きのよしもち

もみぢせぬときはの山は吹風のおとにや秋をきゝわたるらむ

秋デモ木ノ葉ノ色ノカハルト云コトモナウテ常住同シヤウナ常盤山デハ　時節ガイツヂヤカシレイガ　秋ヂヤト云コトハ　風ノ吹ク音バカリデヨソニ聞テタテルデアラウカ

此詞にてあつかふ事
其よりはかるし
霧たちてそのよしある
おく本にはそのもとの
はなのこゝに霧立て
よめり
今よこ上山のひゞき
の故にはつきまき霧ま
ありそこをとらく思
とよりあるこの京
まその辺なるめでたく
ハ畠にひらけてちらう
ちるらし
霧なるにてハあるな
う

題しらず　　　よみ人しらず

霧たちて雁ぞなくなる片岡の朝の原はもみぢしぬらん

霧ガ立テアレ雁ガサ　ナクワ　コレデハモウ　片岡ノ朝原ハ　紅葉シタデアラウ

神無月時雨もいまだふらなくにかねてうつろふ神なびのもり

木ノ葉ノ色ヅクナル十月ノ時雨モマダフラヌニ　神ナビノ杜ハハヤカウナツテ　チヤント色ガ深ウツタ

ちはやぶる神なび山のもみぢ葉におもひはかけじうつろふものを

心ノカハリヤスイ人ニ心ヲカケルハアハウナコトヂヤガ　此神なび山

ノ紅葉モソノモノギヤ　ムヒハカケイヅ　ホドナウチ[illegible]テシ
ウモノヲ

左親衛府渡殿の東の方の木の末の枝のもとこぢたにめぐりたるを
うへふさふ〳〵なるものこそいとよけれ

同じ枝をとりてこの花ども西こそ秋のたぐひなけれ

同じ本ノ木ノ枝ゲヤニ西ノ方ヘサレタ枝ガヨリ分テアノヤウニ色
カハツタラバ　ナホド西ガサ　秋ノハジメギヤワイノ

左親衛府渡殿の東の方の木の末の枝のもとこぢたにめぐりたるを
白きこの殿はまことにあはれ三代
実録ものも

左のあがりの方を
出でて枝をとりき
てもあるべく枝のもと
ばとあり

枝風の吹かば日よりおとは山ならのあずさも色づきにけり

秋ノタチソタタ日カラシテ風ノ音モカハツテキタガ　今日見レ
バ此山ノ木ドモハ　イロ〳〵色ガツイテキタワイ。千載集。この詞書にて
上句をよみ侍る。
指もとのつるにて瓜の色もかはり
ぬるかとをもふるものかな

是皮ハ[illegible]ノ事ノアル

らんめきけ朝に

ちぐさの花ひろをいろ〳〵秋のこれをちぐさとぞ[illegible]

いく山ならまでなるこき、おとは山の紅葉あをかりしよ
めるる　ぢくやう

国立公文書館
National Archives of Japan

上句は鳴わたる雁
のなみだや落つら
んといふ事なり

露ノ色ハミナ同ジツノ白イ色ヂヤニ　ドウシテ秋ノ木ノ葉ヲアノヤウニイロイロノ色ニソメルコトヤラ　○千秋云。ひとつとの、ハかりのちのことなり。ひとつあるうへのとといへるなり。

壬生忠岑

秋の夜の露をばつゆとおきながら雁の涙や野べをそむらん

秋ノ夜ノ露ヲバ白イ露デソノマヽデオイテ　別ニ雁ノナク涙デアノ野ノ草木ヲバ　ソメルカシラヌ

題しらず　　よみ人しらず

秋のつゆいろいろことにおけばこそ山の木の葉のちぐさなるらめ

もる山の名は
の歌より美濃路
列ところの守山と
書てある山といふ
ところあるはこゞ
万葉集にハ此集
同へまうづるとき
もる山とよむところ
までとあり

秋ノ露ハタヾ白イ物ヂヤトバカリ思フテ居ルガサウデハナイサウデ　色マチマチガウテオクサウナ　ソレデコソ染ツタ山ノ木ノ葉ガアノヤウニサマザマノ色デアラウ

もる山のほとりにてよめる　　つらゆき

白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり

露モ時雨モキツウモルコノ守山ノ木ドモハ下葉マデノコラズ色ヅイタワイ

秋のうたとてよめる　　ありはらのもとかた

雨ふれど雲もらでとくさそう山ハ山ハうぢう紅葉ふるみんん

カサトリ山ハ傘ヲモツトニ名ナレバ 雨ガフツテモ雲ホド

モモリハ スマイニドウシテアノヤウニ 紅葉シソメタコトヤラ

彩のやうに山あるとをまろ〳〵ふ射まつぐきのうちの紅

葉をよくよめる つくもき

ちそやぶる神のいづきまちふ葛も枯まあ〳〵ぐろうひまろう

コレハマア 神社ノイガキニハウテアル葛ナレバ 神ノ名守リデ 色ハカハ

リソモナイモノナレド ソレデモ 秋ニハエヨメヘズニ色ガカハツタソイ

ツ見みこの家社の家をよめる

雨ふれバとくさそう山のとくぢ葉ハ行ふ人のそでさへぞくる

たぐ月ね

○一 竜取山ノ紅葉ハコトノ外ヨウ染テ往来ノ人ノ袖ニデサ

色ガガヤイテテリアス

宮ヲ年ノ八月時きさいの宮の宴の人を社方

よさ人ぢ〳〵

ちくねぶるかねてぞをしきかぐぢ葉ハ色ハうぎろ社色と

ちわは深つく

〇此紅葉ヲ見レバ アダチリハセ子モ チラヌサキカラサ惜イ

モウナ今ニツメタレバ オツケチルデアラウトゆへバサ

さわ山ハ来日山の西ノ方ニあり

さうこの所のころと海を截て[illegible]をてゆくとこゝハ[illegible]くゝんゝ[illegible]の羽おくて見まハしこゝろ〳〵

やまとの国よりまくらの附さわ山よ春のくゝく
里なるとこゝてある　きのとものり

誰くあの深ゆゑぶら紅葉のさわ山へとこゝろくゝくゝ

○此サホ山ノ紅葉ハ　ダカタメニドノヤウニ大切ニスル錦デ　アノヤウニ春ガカクレテ　人ニモ見セヌーヤラ　セツカク紅葉ヨ見ヤウトゴフテキタニ

見ぬこゝ此都の方合の方
よゝくゝず

紅葉ハ春ハ[illegible]佐保山のもゝの紅葉ふまそ[illegible]

うすきとゝふまふ
ゆきをむくてよ
ゆるのくゝ[illegible]と云
ゆく紅を惜むん
うゆこのうゝハ歌
くとゝ

セニ井
前載ハ[illegible]木[illegible]
ゝゝろをゝ[illegible]の端
羽木[illegible]ありて云

春ハドウソケサハ三テクレルナイ　アノサホ山ノ秋ノ紅葉ヲヨソカラナリ見ルヤウニ

紅の[illegible]　坂上これのり

さホ山のもゝ[illegible]色ハ落ル花ト紅ハ浄くもあり[illegible]

○ソウタイ秋ノ木ト云モノハナニボ深テモ色ノアリ濃ウハナラヌ物ナレバ今此サホ山ノ秋モ色ハウスウテ　深ウナイケレ共　アノケシキヲ見レバ　サテ〳〵早秋ハイカウ深ウナリタ
フカナ

人のせんざハよ菊よむくびつけてうゝ[illegible]

ハこのころよりの示
らりしと

ありはらのなりひらの朝臣

酒

うゑしうゑば秋なき時や咲かざらん花こそちらめ根さへかれめや

○カウシテウエテサヘオイタナラバ コレカラ後 秋ト云時ガナイ
コトガアツタラバコソ サカヌコトモアラウカシラヌガ 秋ト云時節
サヘアラバ咲ヌト云コトハアルマイ 此今年ノ花コソチツテシマウ
ケレ 根マデガ枯レウカ 根ハカレハセヌゾナラバ イツマデモ毎年秋ハ
咲クデアラウハサテ

寛平御時きくの花をよませ（オヨマセナサレタ）たまうける

としゆき朝臣

この注ハ俗の好人のしらざるなり

是ハ久しき事を養ふとの人菊を愛して年をのべしよし又菊の露をのごへ百歳あまりあ

久かたの雲の上にて見る菊はあまつ星とぞあやまたれける

○カヤウニ禁中デ見マスル菊ノ花ハ 雲ノ上デゴザリマスニヨツテ
天ノ星ヂヤトサ トリチガヘラレマスルワイ

この歌ハまだ殿上ゆるされざりける時にめしあげ
られてつかうまつれるとなん

是貞のみこの家の歌合のうた

紀友則

露ながらをりてかざさん菊の花老せぬ秋のひさしかるべく

○菊ノ露ハ寿命ヲ長ウスルモノヂヤ キケバ イツ〳〵デモ年ノ

ヨラズ秋ヲ久シウ重テ長生（ナガイキ）ヲスルヤウニ（べく）此菊ノ花ヲ雪モソノマデ折テ頭ヘサヽウ

宝永乙酉仲きさいの宮の会の

大江千里

うゑ〳〵射芸殿どのあく〳〵菊うつろふ林ふかんとやとく〳〵

○春ウヱタ時ハ早ウ咲チサノ秋ニシタイト云テドホニフタ菊ガアア　盛リガヨテモウ色ノカッテシマウ時節ニナウテコヤウニナウタノラルヤウトハ　ムフタカイ　○子林ニ待ヨウヤ。りドハやなの子

ふく〳〵ろふ林よあらんとも　ふハぎり〳〵ものとゝ〳〵るかな。

おもひ〳〵ハ射やさルる菊合ますハまを洗ろうて菊の花ゝ多ゝうハ〳〵ふくれ〳〵ろ〳〵ハ〳〵ふきあげれ

濱のゝさま菊植ゝうハ〳〵をよめる

すゞゝゝの朝臣

林風の吹上ゝそゝる高〳〵ぎく八ゝ〳〵ゝあ〳〵ぬゝ浪のよ〳〵るゝ

○秋風ノフク〳〵吹上ノ濱ニアルアノ白イ菊ノ花ハ花カサウデハナイカ浪ノヨセルカ　風ガフクナレバ浪ノヨセルヤウニモアルニアルガ

仙宮ニ来ヲヲケテ人のいゝ〳〵ゝをよめる

素性法師

林風の吹上ゝ浪のよ〳〵ハ〳〵ゝ

ぬれて花山路のきくれ葉のまふいろ千年を経ハ仙人山を入く人の基
とおぼえ侍るを寄せの柄の打ちをおぼろきりんるを云てよめるまろべ

○在所ハカヘテ見タレバモハヤ千年モ経タヤウスヂヤガオレハ仙
人ノスミカハイクトテ　山路ノ菊花ノ中ヲ分テイテ其菓ノ
香ニキル物ノヌレタラチス間ダホドノチヨトマデアツタニ
イツノマニアノ千年モタツタヤラ

きくの花のもとふく人の人まてるかをあるる
ゆれ

花見つゝ人まつ時ハ考ろ人の袖ゝこのゝそあやまゝれけふ

○庭ノ菊ノ花ヲ見ルクル人ヲ待テ居ルトキニハ ソノ白イ花

ガソノクル人ノ白イ衣ノ袖ノヤウニ見エテ ヒタモノ ソヂヤカト
トリチガヘラルワイ

大海の池れゝくふ菊うゑたるをあるる

一ゆゝくふひゝきくをおやさハの池の底ふもたれゝうゑたるゝん

○タタ一本ヂヤトカフタ菊花ヂヤニ アレハ池ノ底ニモアルワア
ハ誰ガ池ノ底ハモウヨタヤラ イヤヽヨウスレバ影ノウツタ
ノヂヤ　子ガ花ニ見レまで四ツの歌ハ
ミヲウれすノタノクゝあり

世の中ハ花ゝきくをゆひ分ゝ人ノ手ノ中ニ
見てよめる　法ゝやき

ゆゝふ子潮明とハ
人九月カノ子ゆゝき
の菊をめゝゝ子ハ
あゝり分ゝ子ゆゝ

ゆゝ分ハをりくせて
おこせし其使自長
と云ゝ一ゝ話
子白衣来と似イノ
ゝのゝ子ゆゝ白ゝ人
の神とよめり

秋のきくみわふるぎくハかざ〳〵てんぞよりさ死とあ〳〵ぬ
こぐ身を

○菊花ヲカヅ咲テアルウチハ美ルニデハ カザレテアノバウソ
アノ花ヨリサキハ死ナウモシレヌ 家ノ子ヂヤモノヲ アノバイデハ
白菊のををよめる 元の内こうね
ムあそ ホをこゝバやをこゝん初霜のおきまど毛る者〳〵菊のを
○アヤウミ初霜ガオイテ 花ヤラ表ヤラシレヌヤウニ ガウテ
兄元 白ノ菊ノ花ハタイガイスイリヤウデ ヲレバ 折モセウ
ガナカ〳〵兄合ラルヽデハナイ
是ハ今ノこの秋れ言合のこと

きくのさくうは秋の表ウきあ〳〵れさ表をよあ〳〵ムあそハ表ウる初をやこの秋よ初てこるぞこ〳〵

よこ入〳〵

いろ〳〵る秋のきくをバ一ヒをふゆこびよりの今毛とこそ兄ま
○ハジメノホドハトント格別三色ノカツタアノ菊ノ花ハ四ジ
本ノ花ト兄エヌ一年三度サイタ花ヂヤトサハ兄、
俳我下白ニ遠ノ 芭蕉ドろ〳〵

仁和ちるあきくれなめ〳〵ふる射は言ろ〳〵ぞれ
とおろやこれ是バよこてをノ〳〵る

平さごゝん

秋をおきて時ろあノ〳〵れきくのをろろふ〳〵ふ色のまれ

仁和ちるハ光孝天皇ノ仁和四年ヨ京の西山ホ紙〳〵九ーよノ仁和ちと
いふ

○キクノ花ハ ウツロイマシテカラ ヌカヤウニ始メヨリハ色ガマサリマスレバ 秋ノトサカリバカリデハゴザリマセヌ 秋ガスギテカラヌ マイチド 盛リノ時節ガサゴザリマス 恐レナガラ 陸奥ノ名所モコノ菓ノ部ノトホリト存ジマシリマス

人の家あり久るきくの花をうつ〳〵ながらうるをよめる　作者もれ

咲そめ〳〵あ〳〵あ〳〵ろれバきく此花色さへそうろひみ久まし

○此菊ノ花ハ始メニ咲タドキ、ヤドガ替ツテウツクタレバ所イウツタバカリガ花ノ色ニデガサ アヤウニウツテカハツタワイ

ろろふとうつる菊をうつろふもとうをうつるあれバ白言もてあやとすまろ

べ〳〵ハべ〳〵〳〵てゝ帳はちりぬべきあるよまろ〳〵

関雄ハオ宮まあり て往ちこ宮居と このあるこんて山里 チこのれるもと東 山ほとと名づけ くるとく関ハまん こうこのあハそ こまてよまれ〳〵な ろべ〳〵

影こず　よこ人ぶ〳〵

佐存山のちこそれもこぢ色ぬべく松さへ見よと照す月かげ

○アノサホ山ノ作禾 モミヂガ オツケ色ラウヤウニ見エテ ヨツテ 昼バカリデナレミ 夜モ人ニ見ヨトニテ アヤウニ月ガ アカイ

こゝ色づく久〳〵ほろ〳〵まつこで山里ふこりノ佐ノ付ケ ろよまろ

菓系関雄

おく山のいそう紅ちこぢ色ぬべ〳〵てこ日の光り見る附ゐて

○此ヤウニ高イ岩ノ紅葉地ノ所ウニ立テアル陰ニアル奥山ノ紅葉

八日ノ光ヲ見ル時モナシニ成テシツテアラハレガ アヤチ
ヲシテイオレガ身ダウ(モテウド)ニ此紅葉ト月ジテヂヤ

新〜〜〜〜〜　よこ人あるず

三田川ハ所ごとぐれてあるがあのうちくばゆ中やたこそあん

○三田川ハ紅葉ガチリミダレテ今(ナイマ)寅中流レルヤウニ見ハレル
ソレデハ今渡ツタナズ　月ツタラ殺ガ中カラキレルデアラウ
カイ

はるかあるこ人あるこのうちぐれ出ぬ所あるシトあんヤ
たつたかはのこぢ(ミ)ふかみ　神なびの山ろの山は時雨ふるらし

まの葉の風ふきちらハ　よりのてふて
五月雨とあるも
古ものよまず

あのゆんハ〜〜〜〜
ふ葉ふあのぐとこ
てくるとふとも
ずこの葉ふハち
くるとふとこ
このあのゆくあく
ぞくふ三八すこ
〜

ゆくぢちのゆくとこ
と見て紅葉の

○此川ニ紅葉ガナカレ　神なびの山ニ時雨ガシテ風ガフキ
ヲ　時雨ふるは風のふくことをのもさるあるべ〜
まくハあるべかりけるこぢ(ミ)ふ流る

此ノ下ニ人ヲ行リ

高〜〜〜ハ唯　ハ月ヒとあのゆん紅葉だをふきちらすあ〜そ山おろしの風

○紅葉ハモウ葉ラシニウタガ　今カラモ葉タ紅葉ノ名ヲイ
時ニハ　ハ落葉ヲチリ花ヲ　ヲ(アイ)セウニシヤウヨウヘフキチラシテ
ヤルナイ　コレ山オロシノ風ヨ　千秋ニ　あのとぢ(ミ)ふハちりあまくこあ
紅葉ヲ　ちくり　ちあくハ葉ふ
月ヒとものあ　ハ月ヒとあるとあるて

林風ふあ〜ぐちりぬるうとぢ葉のゆくへさぶめぬ　ぞ

のミ多クノ葉まま

○秋風ニエコタヘズ青ナルアノ紅葉ノ アチヤコチヤ黄テイテ ドコ行イ
ク方ノ定ニラヌヤウニ オレガ身モ行末ドウナルコトヤラレレヌガ
サカナシイ

枝ハ青ナル紅葉ハ世ノ人ノ心ヲ
○物ガナシイ時セツニハ枝ノ紅葉ハ庭ニチリテレシウ ツ散リ
シイタ落葉ヲマミ分テタレモ拾ナテ九人ハナシ サテモ〳〵何モ
カモノ白ウテ世ノ中ノコトカナ 三ノ宮ノ御ふみをつくづく。
御枝ヨ初白ト枝ノ青ハ年ヌトヨウハ青ノ色 枝ニハ初
ゴヨ〳〵き射ヲ色ノ白ウテ何ヲ〳〵。

古五十二

ツ〳〵わけてさゝふやとハんもくちぎ葉のふりかゝ〳〵ヒロ
○アノ家ハイルヲハアノヤウニ紅葉ガチリシイテ タレモ人ノミラ
ヌヤウニマミ分テコヌヤウニト 陰シテアルヲチヤニ サウトヲル
ナガラ ソレヲマミ分テ 今サラヲ舞ハベキヲカ サウトヲルナガ
ラマミ分テヲ舞ハウヤウハナイ

枝の月山ぎやうふてゝせるハおつるめこちの数をヲ人ヨとろ
○月ノアノヤウニ山ヲサヤカニテラスハオチル紅葉ノ数ハイク
ツヲヤトヲコトヲトクトヲ人ヨトテノイカヤ

吹風の色ハちぐさ ふコヲ人ヨとつゝハ枝のこのハハちれバあノクク

色のちぐさ書こく
葉の本ヨハちぐさ
のヲとあり

白樂天の詩ニ織霜織雪の三枚錦とあるも是ととるべしるあるべし

○風ハ色ハナイモノヂヤニアノヤウニ風ノ吹ク色ガ イロ〳〵ニ見エル
ハドウシタコトカトゼベ 紅葉ノチルユエヂヤワイ

セきを

表のこそ雪のぬきこそよりて山の殆れおれバくちる

○山ノ紅葉ハ雪ヤ表ニ染テソシテ殆ノヤウニナルヂヤス
ヤヂ表ト雪トガ殆ハタラ織ル竪ト横トノ糸ノヤウナ物ヂ
ヤガソノ雪ト表トノタテヨコノ糸ガサ弱イサウナソレユエカシ
テアノ紅葉ノ殆ガ織ルカドゼベヤ斤カガカラ破レヤウニチリス
うるんゐんのおれうげわこずこそよこそろる

古五ノ三

たゞ〳〵こてハこうやすらひてあることをこそ
諸ハこうたのひ木ハ
ゆ雨ゆりそとこうあ
く世ゆるゆるひ
こうこう人のそゆる木ハ
ハ紅葉ゆたゆの西ゲ
るくちこそ
ゆるくゆんゆるゆ
ぬんをひび人ハ

侍四通服

わび人のゆきてこうよるこれ本ハ杉ひがげるく紅葉ゆ
ナバレフナ身ハ ナニカラチニデナバレフナモノカナ コレハ杉モシ
イヨイ陰ヂヤトゼフテ見タテ、立ヨルコノ本ハ ヨミモ早ウ
紅葉ガチツテレヲテトリウケテ早ウ
二條后の春宮ゆこやすゆとヤ月ゆ附ゆ屏風
ゆたつこ川ゆ紅葉ゆゆゆれこそをうろうけゆ
を影ゆくよゆる こそゆ
ゆこゆ葉のゆゆれてゆゆこれとゆハ紅ゆゆき浪ゆこそん

此三田川ノ紅葉ガツイト下ヘ流レテイテ上ハ湊ノアタリハ一ツ
カイナ色ノヨイ浪ガタツテアラウカ

同　　ありひろの朝臣

ちはやぶる神代も聞ず三田川くれなゐにみづくくるとは

此三田川ヘシデウ紅葉ノ流レルトコロヲ見バトントト紅蓮子
紅レボリトヒエルワイ　サテ〳〵奇妙ナリカナ　神代ニ世ニ
ノキメウナ事ガアツタデヤガ　此ヤウニ川ノ水ヲ紅ノクヽリ
ゾメニシタトヲツハ　神代ニモイツカウキカヌイデヤ
○子扶云。くゝりぞめハ。今ノ式ニ。ふちコヽテ。纈纈トいフコトナリ。

（千里　散乱　塵子　散乱　ちらけさ　まくらぶ山ホトゝぎす　とよもす　ちらす　花ハ　ちらす　山ホトゝぎす）

長谷ノ三所ノ社ノ方ノ合ノ歌

ちはやぶる神の御代ハ　たゞ〳〵ね

赤木つるあるもあるもあれど〳〵恋山おもこの二所ナの壁ニあがふ
此クラブ山ノ木ドモコハノ家中チリバガウノデ　今トホツテ来
タ方モドチカラチタヤラシレヌ

神ぶびのこもりの山を秋ぬけバ弱こちまる人ハちこそすれ
今秋ノコロ式神ナビノミムロノ山ヲ通レバ　紅葉ガチリカヘルデ
弱ヲ着ルコロモデガサスルワイ

○子扶云。こちの弱まき。恨
後ヨハこの行るきぐよろ〳〵

飛鳥の神遊ビ

くらぶ山紅葉臣とふ人の言ふに宣旨かしこまりて故々不破らざるハ錦衣を着て夜行が如しとのまゝ古をれよりくらぶ山のおわくらるゝやそこふも夜の錦とくとへあせり

きゆる
てし

北山にもみぢをらむとてまかれりける時よめる

つらゆき

見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり

ナンデモセンノナイコヲバ夜ルノ錦トイフヂヤガ 見ル人モナケレニ此ヤウニムダニ散テシマウタ奥山ノ紅葉ハ ナンボ見ヌデ錦ノヤウデモ マヽコトニ夜ルノ錦ヂヤワイ

秋のうた

かねみの王

竜田姫たむくる神のあればこそ秋のこのはのぬさとちるらめ

竜田姫ハ神様ヂヤガ ソレデモ又外ノ手向ナサル神様ガアルヤラ ヨソ外自身ノ外添ナサッタ 紅葉ガ アレトソノ手向ノ麻ヲチラスヤウニチリマス

小野ハ京の北ニあり山里なり

小野といふところにすみ侍りける時もみぢを見てよめる

つらゆき

秋の山もみぢをぬさとたむくれバすむわれさへぞ旅ごゝちする

秋ノ山デハアレアノトホリニ 紅葉ノチルヤウスガ テウド旅人ノ道タダリ神ヘ麻ヲチラレテ手向テユク所ノヤウニ見ヘルニヨッテ 住テ居ルコチマデガ サドウヤラ旅ノコヽチガスル

今の世まで立てあるハどうゝ左ゆきハ
こゝてとあり
三田川のくゝゝゝ神
並山のあゝゝゝ
ひあやまりてとある
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
よあゝゝてとあれバ
ゝゝれゝ接ひく
若ハ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

神なびの山をるとて たつた川を渡るとて 舟よりこぎ
のあゝれゝるとよあるゝ　きよゝゝのゝやぶ 月

神なびの山をるゝ紅葉ハたつた川みぞぬさやゝ紅葉
コチモ今ハ神ナビ山ヲ色テキテ三田川ヲ渡ルガ 暮テ行秋モ
ソノ トホリデ神ノゴザル神ナビ山ノ 紅葉ハモウ女ゝデ ソノハスギテ
西ヘユクバ アレノヤウニ 紅葉ノヌサヲバ三田川ヘサダメテ
神なび山ハ山城ホ乙訓郡三田川ハ三の西ゝく流ル高
上郡ニモ同名ノ川ノあるゝこの歌ハ別ノ者ノ
。多数ニ呼ノ二北者ハ多数者ノ初ニ若菜ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

彩雅万葉ハ三の
ゝゝゝハ未の
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝ

安平小舟きさいの高の高今のうゝ

後京極きき風

白玉ゝ水秋のこのゝのうゝとあまの流る紅ゝとぞ
浪ノ上ヘ木葉ノチリテウイテアルハ 撫師流シタ船デハナイ
カトサヲ足ル

三田川のゝとゝゝゝゝゝゝゝ

坂上是則

ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

伊勢ノ海ノ浪ノ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

木葉青イノハ色ノカハルデ秋ガシレルガ 水青イノハ色ノ外

ラヌモノナレバ 秋ガレレヌニ 今ゾ立田川ノ水ヲ見レバ 紅葉ガ流レケリ

秋チヤトロフガレレタ モシ此ヤウニ紅葉チガレルコガナイナラバ 水ノ秋ヲバトウレテ誰トカレラウゾ レルモノハアルマイ

あぐの山ゾエルふそよある たちこちのつくき

山のよ風のかけさる あぐこ山ハあぐれもあへぬ紅葉あり

山川ヘアレ風ガモテキテ レガラミヲカケタトヲエルハ エナガレモセズニトツテアル 紅葉チヤワイアレハ風ガクデアリシデウモミヂガチツテセキカケ〳〵流レテクルニヨツテサワ〳〵ト下ヘ 上流ヘテハイカズニアノトホリニガラミヤウニヨドムチヤ

あぐこ こゝあてハ 此なまて あぐの言ハ よ子 ぐれらたそぬとゝ ぐこ〳〵

池のそとろふて紅葉ふのちるをよめる

こ唐ね

風ふけバ落るめこぢ葉ハ清こちゝ成彩さ人底よ見ゝ不清

風ガフケバ チトヅヽロ〳〵紅葉ガチリカケタガ 此池水ガキヨケニ ダチラスニ枝ニテル紅葉ノ影ニデカ底ヘヨウウツテ ハヤ大分チツタヤウニ見エル

真さ院の五寿風の絶よ川見ゝんとする人のめこ

ちのちる木けトふるをひろ〳〵たゝくるをよめる

ナケ オヨマセ

まひ名れ入ろうまへを見る

池ハ清ハこの見えるわ すみきよ水こゝろひて 池のこゝをとゝろ〳〵

又そのそばをとこ
ホおもど

たちどまり九一七を涙くんでぐべくあるとあるあハまさらぐ

シバラク立上リテアノ紅葉ヲ見テカラ氏川ハ渡ラウ　雨ガフレバ水ガマシテ川ガ涙ラレヌチガガ　紅葉ハ雨ヤウニチンボフツタ上テモ水ハマシハスマイホドニ

是ハ見ごこの赤れ三分のあ

ゑぐこれ

山田のる秋のうわふおく寒ハいまおわせ者の涙ナミダおりけり

秋ノコロ山田ノ番ヲスルトキハ屋ヘコノヤウニ寒ノオイタハ稲貫セ

鳥カ此ゴ只来テシゲウ鳴たバ　ソノチミダチヤワイコハ

うわとハもぐきて
ヲしわとハ手伝まて
とのぐくるあ山ノ葉
ホ借屋ヒラタクル
ハ田ノまき黒秋
まおりてその田ハま
よりそうそのの庵
を拾ヤてそこまを

稲ヒ刈干おぐーハ
てを好黒入うるこ
その番をうりとと
ニ考くるるおとと
追ヒていとちひぐく
拾ヤておくをうま
あぐ

歌ぐ　よこ人考ず

わゆも岩山田をりぐとぐ衣いおぐの寒まぬ花ぬ日ハ子

○二ダ穂モデヌ山田ヲトウカラ番ヲスルトテ　毎日ク稲葉ノ寒デキルモノ、ヌレヌ日トヲハナイ　百姓トヲモノハアーナニギナモノガヤ　ハヤヤヤヤヤヤヲ上ニハ存知アルハイカ

蓑衣ハやーきをのくきりのこ。よ秋ニ云考ろ人ヒ
ひゆふぐきろこ。トろーて半きき人の九ハバをも知りをり。
まさ半き人のトゴトのおりさ数をもよく考ろーひすぐき
ハ考
あり。

ひつぐハ一家刈ろ
稲穂より又葉

刈ろ田ホあるひつちのわよ出ぬハ世をらさろふあきたそぬ

のゝ生まるとのへ

僧正遍昭とゝ云詞ハ後ニ加へしもの也

○苅テシマウタ田ヘ又アトヘハエタヒツチノ穂ノデヌハ時節モモウ秋ガハテタニ世中ヲモウアキハテタレバ今サラ穂ヲダサウヤウハナイトイフテノコトカイ。子秋ニ人まよひとハいふ詞ハ 三の句の上へうつして見べし

北山に僧正遍昭とたけがりにまうでけるによめる　そせい法師

もみぢ葉は袖にこきいれてもていでなん秋は限りと見ん人のため

○此紅葉ヲバ袖ヘコキオロシテ入レテ持テ此山ヲ出テイヱデミヤゲニセウ　人ハ定テ秋ハモウハヤシマイヂヤト云フテ居ルデアラウガサ云フテ居ル人ノタメニサ

今の本ニ竜田川ニ思ひやりてとある八ひがこと也古本ニ無

寛平の御時ふるき歌たてまつれとおほせられければ竜田川もみぢ葉ながるといふ歌をかきてそのおなじ心をよめりける　おきかぜ

み山より落くる水の色見てぞ秋はかぎりと思ひしりぬる

○モシヤ深山ナド上ニハマダ秋ガ残ツテアルデモアラウカト云フタガ此ヤウニ深山カラ落タ紅葉ノ流レテクル水ノ色ヲ見レバサ　サテハモウイヨイヨ秋ハシマヒニナツタト云ヒシツタ

秋のはつるこゝろを竜田川に思ひやりてよめる

国立公文書館
National Archives of Japan

川せとゝゝをとゝゝべ

夕づく夜ハをゝゝまとゝそん冠絆シ日ホ夕月夜ハあるまぐゝろ多のミまあゝぬこと考べ

法ゝめき

年ごとにもゝぢ葉多べ三田川こそ秋のこゝろ多りあゝゝん

○毎年ゝ秋ノ紅葉ヲ　筏ヤ船ノヤウ流レテヤル　三田川ハ川下ノ湊ガ秋ノ上ヘル所デアラウカイ　ソレヲ湊ヘ寄ル子テイイテ秋ニアヒタイモノギヤ　クレテ行ハノコリ多イ秋ギヤニ

あゞぎきの起ごりの日大井ゆゝくよあゝ

夕月夜をぐゝの山よ唱鹿ハ三多のうちも秋ハくゝゝん

○一　ケフハ九月晦日デモウ日モクレ方ニ列タガ　ヤレアノ小倉山デ鹿ノナク長イ声ノキレヌウチニ　ハヤ秋ハクレテシウテアラ

まとまたをけをゝバ上のゝハ秋ハ立て秋ハ落ちうよゝ

ウカ

月ゝはごもりの日よあるこゝろね

乃ゝゝバ寄ゝ多もゝんもゝぢ葉をぬさと多ゝて秋ハいまゝり

○秋ハモウ紅葉ノチルヲ道ノ神ヘ麻ニテ手向テ旅ヲスレテイニデシウタワイサテモ〳〵ノコリ多イコトカナ　道ヲシウタチラ路カラ寄ル子テテリトモカウ

頭書古今和歌集壹殘巻第五

これハ上の言葉の終りの歌のつゝきとあるとハコトヽシ永和ゝ比ひまどる説あり

人目のかゝるあるかるゝにうゝ人めぐゝゝゝハ万まゝ子離の事

頭書古今和歌集書入第六

冬歌

歌ゝゝず　よゝ名ゝ

立田川ハ名ありゝくゝゝと形月ゝゝゝれの雨を左て吹きふゝて

○立田川へ紅葉ゝ子ゝテ流レルトコロヲ見レバ時雨ゝ糸ノヤウナヲヲ堅横ゝ糸ニシテ機ヘカケテ錦ヲ織ルト見エル

冬の部をとてよめる　源ふ千朝臣

山里ハ冬ぞさびゝさまさりける人めも草も枯ぬと思へば

○山里ハイツデモサビシイガ冬ハサベツシテサビシサガ三シタワイ 今
コヌフラ人目ガカレルトラヂガガ 今デハタマ〳〵スエタ人目モカ
レル 草モ枯レタニヨツテサ 望月ヲ見ルヒヾ
まどゐふ月ゞ見ふ〳〵 ふ仏ふ〳〵
影〳〵らゞ まろ〳〵ず
大空の月れひろ〳〵清ラレバ新スル〳〵みぞまづ求ル
○昨夜ソラ月ガキツウサエタニヨツテ〳〵影ノ見エタ水ガサ
ケサアレアクヤウニ一ツ一チバンニコホツタワイ
○ふ秋三三の白芙蓉ガ多ク朋輩ヲ
ヒラレバトアルソノオヤまさりて
ヒラ月
タされバ衣を重ネ〳〵ことより野のよ〳〵ハ山ハ三雪ふるら〳〵
○ふ仏コロハユフカタミナバイカウ寒イ 一ツ着テヤナラヌコトハモウ
吉野山ハ雪ガフツタサウナ
今ヨリハつぎてふ〳〵多ん孫ゞとの居おりるとふれる雪を
○コレカラハツゞイテ降ラフレカシ コチノ庭ノスキラオレナビカシ
テツモツタアノ雪ノケシキキツウオモシロイ
ふる雪ハうゞそくぬしわ〳〵ひきの山の洲つゞ雪まさるシ
○山ハ雪ガフルヤウスガヤガ フルウチニハヤ斤ノカカラサキエル
サウナ ソノ雪トケトルエテ アノ山カラ流レオチル川ノ水ガ三シ
タされバタ〳〵あれ
バとあり
してハ
お彩撰万葉ふ朋
孫ゞ
のこ
タされバ
とフゞ
うきふ
とうゞきを
ふ仏
みるとき
まバ
ヨされバ
このタされバも多
あれバ

浮世雪げとハ珠雪とゝふハ其のことゝ
ゆゝしと云ヘリ　ハラ〳〵冬も雪の
きゆるハ雪げとよ
こ時の降るハ冬も
時雪と云のゝ

テ　音ガアレ言ウチツタワ

この川すゑとぢ水ぞ流るゝ　おく山の雪げの水ぞ今はまさる

○　武川ヘ紅葉ガ流レル　コレマデハ流レテコナンダカ　今アヤ　五のゝき

ウニ流レテキタハ　川上ノ奥山ノ雪トケデ水ガサヽシタカウ

ナンデ川上ニヨドンデアツタ木葉ガ今ニ流レテクルデヤ

あゝハあゝの山〳〵ちらるれバひゝ日もミ雪ふる日ノ子〳〵

○　武吉野ノ里ハ言ル山ガモイニヨツテ　ケガチ一日モ雪ノフラタ

日ト云ハナイ

冬ごりハ雪ふりあきて花もなしやうやうとけてをふ入〳〵ふれバ

○　コチ〳〵延ハイチメン三雪ガウモツタマヽデ道モナイ　フミ分テ引ル

子テクル人ガナイヂヤニヨツテサ　通ツテクル人ガアラウナラセメ

テ乃バレレテアラウニ

冬のうちくらくよあるる　紀貫之

雪ふれバ冬ごりしたる草も木も春よ春とそ人もめぬらん

○　冬ガレテアダメモデヌ草モ木モ　雪ガフレバ　春ニサタナレノ

花ガ咲タワイ　ソウタイ花ハ春ニ咲クモノヂヤニ

あづの山とれふくよあるる　きのあきらか

白雪のこゝろもとゞ〳〵ふりあぐ　いけるかふ咲ぬとこゝろ乃花

○雪ガトコトニイナレニ タヒラノメニツモツタレバ木デハナウテ花ノ咲

イイ岩ハモサ花ガ咲タト見エル

千枝ニ。嶺ノ山ニハ花ノ名ドコロアレバ。

未ノ旬ノコトヲ。ゆひ〳〵。よめ〳〵。

あ〳〵の。ゆきはまろかりのろきときゐやどれりのろと

ころあてまある　坂上これのり

こよ〳〵郷の山は。ゆき〳〵。雪つもるゝ。ゆき〳〵。ゆきまさるゆ

○今夜ハ吉野山ノ雪ガイカウシモルサウナ　ソレデハ〈ニ〉デガ此ヤ

ウニダン〳〵サムサガ〈ニ〉サルナヤ

寒ネ中ハ附きさいのこゑのこゑ合のうさ

このつゆ〳〵〳〵ゆ〳〵と云

あり〳〵まさるゆと云

ハ雪ゆゑ〳〵ゆきまさ

のゆゑ〳〵ゆ〳〵ゆきまさ

るゆ〳〵ゆと云ひあり

まさるゆと云

やゝ分て入ゆゝと云

ハひとゝさきのうゝを

云ゝゝゆゝゆゝを云ゝ

ゝゝ枝ゝを入ゆゝ先の

ぎ〳〵のおきゐゼ

浦ちゝ〳〵ウリ〳〵雪ハゆゝ〳〵あゝこれ未のまゝ山ゆゝとゝゝ

○カ奥州ノ未ノ松山ト云所ハ古ノ三浪モコエントヨンデアリテ

名ノ高イコトデヤガ今ハウ海辺ヲイ所ヘ雪ガフリテクルケ

ニ三キハ白イ浪ガ一コトニウ未ノ松山ヲカコエルノカトアエル

終技は初句を未の松山はあゝりの浦とゝゝゝゝゝゝ

がゝとゝこの浦ハゝゝまれ河の浦あり。

千はやぶる

こよ〳〵郷の山は高〳〵雪やゝ分て入ゆ〳〵人のおとゝれ高

門すよあるところも
いとゞあはれなるべし

源氏手ならひの
巻に物ゝ乎ますます
こひしき折ふし雪
ふかくふりて人め
たえたるころぞ人
ひやりなき方なり
ゆるところなるよし
おもひなすべし

○吉野山ハ弥イ雪ヲフミ分テコモツタ人ガ　ソ後一向ニオトヅレモナイガ　雪ガ降ミフカウナツテ便リモシラレヌイカ　イヨヽ無事ナガ　寒気ヽツヨイトコロナレバモシワヅラハレナドハセヌカアンジラルヽワイ

白雪のふりてつもれる山里ハすむ人さへやおもひきゆらん

○雪ノフツテ降ミフカウツモツタ山里ハ　サゾヤ寒ウハアラウシサビシイヤウハアラウシ　サウ云所デハ　住デ居ル人ヾデガ　心ノキユイルヤウニ思フデガナアラウ　雪ハシマイニハ消ルモノヂヤガ　ソノ雪ノヤウナ心ヾデガ

むかしもおもくの
跡ハふみわけて
あとハ量許ホの字
を用ひてそむ
うまくことをまき
とりみ

雪の跡を見てよめる　凡河内みつね

雪ふりて人も通ハぬ道なれやあとはかもなくおもひきゆらん

○雪フリニカウシテ居ル家ハ　外ヘハ　此ヤウニ雪ガフツテ　人ドホリモタエテ　足跡モナウナツテ　ソコト云筋モシレヌヤウニ消テシマウタ道ノヤウナ物ヂヤヤラ　カウシテ居ル心ガキエルヤウナ

。千秋云三の句のあれやと結句のらんと呼あつひたる辞をよく味ひしるべし

雪のふりけるをよみける　清原ふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるハ雲のあなたハ春にやあるらん

本のなのころろま
て来れまよりく
云

○一タヽ冬モナガラ空カラアノ雪ガ花ノ散テクルハアノ雲ノアチラハ
モウ春ヂヤカシラヌ

雪の木にふりかゝれるをよめる

つらゆき

冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪ぞふりける

○今ハ冬ゴモリデダメモデヌアノ木ナレバ思ヒガケモナイニ枝ノ
アヒダカラ花ノチルト見エルホド上ニサ雪ガフルワイ

やまとの国にまかれりける時に雪のふりけるを
見てよめる

坂上これのり

までハゆめのとぞそう
ろふこゝまでハいふ二
までくかりきハ
ある詞なくばかり
とかよ月にこふ
月とみえがりてふ
言しこれをこころる
ぐるひてこのあとう
す雪がふでふ
このあれつふでぞ
まさる人のかさ
くよ木のあぞふ
りき雪をよめる
とおもへ

朝ぼらけ有明の月と見るまでによしのゝ里にふれる白雪

○カウ夜ノボウボウトアケタ時ヲ見レバデウド有明ノ月ノ残ッタ
影トミエルホド上ニ吉野ノ里ヘ雪ガフッタ。千秋云、朝ぼらけのぼ
らけハ朗明のつゞまり
ふるし集中に三十あまりの
あさぼらけと明ゆくなどゝ見えたり。

影もなし　まことなり

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそ見め

○此雪ハマダキエヌウヘモ又ツヾイテフリカサナレ　オッツケ春ガ
キテ霞ノタツ時分ニナッタナラ　マレニコソアリモセウケレ　度々(タビタビ)
ハ見ラレマイホドニ

あをまぎるハ万葉ニ天雲ノ[illegible]ト云ヘリ
つゝそぐよゝて天ぐ
もりあひてふゝとふ
をるとつゞりてあま
ぎ〳〵しまりあま
ぎ〳〵ひてとゝろ
ものハ[illegible]
ハ秋ハ[illegible]
ハ[illegible]
よて[illegible]
す

梅なそれるゝ又〳〵ゝ久〳〵このあをぎる雪のあべてかれ〳〵ゝ

○三 あをぎる 雪ガオシナメテドコモカモフツチバ 梅花ガ梅花ト又エヌ 日ニ白サガヤニツテ

此ものハ[illegible]人のいたくかきのかれ人まろぶ[illegible]

梅の枝ハ雪のかれるをよめる

少弁[illegible]

梅の花ハ雪ニまぎれて又ゝ[illegible]ふ白へ人の[illegible]

○花ノ色ハ雪ニ[illegible]ツテ ソレト分レテ又エヌ 人ガ梅花ヲ上ルヤウニ セメテ香ナリトモ ハツキリトシレルヤウニ ニヌ

[illegible]の[illegible]のさ
まをよくこゝよとも〳〵
ハ秋ふる色ともゝ[illegible]
とこゝを[illegible]撰の集
ハ色[illegible]冊とも
〳〵月〳〵[illegible]
のこゝにあるハ[illegible]
てよゝべきをよをま
こゝるハ言[illegible]

雪の中れ梅ゝをよめる きのつゝゆき

梅の香のゝおゝる雪ゝまぎれるゝ分てをゝほし

○梅ノ花ハ色ハ白ウテ雪ニガウガ モシ香デガ 色ノヤウニツモツタ雪ニガウチバ 誰カ雪ト梅花トヲヨウベツ〳〵ニ又分テ折ウゾイ タレモエヌ分チハスマイ 香ガ[illegible]ガ子バコソ

雪のゝりくるをよめる

紀ことをのり

雪ゝれバ[illegible]ゝ花ゝ[illegible]ゝれを梅とゝきてをり

○雪ガフレバ 何ノ木モミナ花ノサイタヤウナワイ ドレラ梅ゲ

ヤトヒ金テ ヨラウジドウモヒ人分ニクイ

おへまくりかる人をまちてあらんの法ごりつふよ

めるる　　こつね

ヒゞまこゝあ年ハあれど冬ゝれ人ハおとづれもせず

○コチガ二チモセヌ来年ノ年ハモウ近ウキタケレ共 今ジブ

ンノ草ノヤウニカレテヨメヘインダ人ハ コチガコレホド待ツノニ

ハダカヘツテコヌノミナラズ チカラオトヅレモセヌ カレルトヲ人

ヨメヘイテヨリシカヌ一チヤツイ

うしのおそくまあるる　あまハうのゆとやく

論語ハ歳寒然後知松柏之後彫ト云ヒ用ゆゝ多あるなるべし

あゝくまの年の終ゆまるぞとよ雪もちどりもかりまくりかる

○一年ノ終リニナル名ゴトニ 雪モフリ一サルガ コチガ身モ暗ク

フルガ二サツテサ 次オニ年ガヨツテイク アコニツタモノガヤ

寒年ノ射きさいの宮の方今社寺

よゝ人ゝゝゝ

雪ふりて年の暮るる射さいそつひよもこぢぬ松も見えれ

○今ハデ雪ヤ霜ヤ射ヌカフツテモ 松ハ色ガカハラナ一ダカ

ソレデモ一ダ冬ウヘ雪ガフツタラバ モミ色ガカハルデモアラウ

カトヒフダガ 今ハヤウニ雪ガフツテモ ヤツパリ色ハカハラズニ

飛鳥川ハ大和ニ有ふけてあすかとつゞけたるハ常のことなれどもくるゝうへくらひあかせれたるハあれ也

モウ年ガクレタカラハ　サテハトウ〳〵シヾウ色ノカハラヌ松ヂヤ
トヲ〳〵コヽデコソ見エタモノヂヤ

年のはてによめる　はるみちのつらき

昨日といひけふとくらしてあすか川流れてはやき月日なりけり

○昨日今日明日トイウテ一日〳〵トクラシテ　ツイモウ年ノクレテ有ツタヂヤ　アスカ川ノ水ノ早ウ流レテユクヤウニ　アヽサテモ〳〵早ウタツ月日ヂヤワイ

歌奉れとおほせられし時によみてたてまつれる　きのつらゆき

ます鏡ハかゞみ也　十寸日の鏡てふ何と　まそかゞみてふハいかなる　まその国造が奉れる　子持日の大鏡　とあまてらせる日をいふ古言ニ

行年のをしくもあるかなます鏡見るかげさへにくれぬとおもへば

○年ノツモルニツレタガウテ　次第ニ残テアル齢ノミジカ　ツムリガキツク白ウナツテ面ハシワガヨツテ　此ヤウニオイクレテイクトオモヘバ　サテモ〳〵暮テユク年ガ一入ヲシウ思ハルヽカナ

頭書古今和歌集遠鏡巻第六

頭書古今和歌集巻之第七

賀歌

題しらず　よみ人しらず

我君ハ千世ニ八千世ニさざれ石の巌となりて苔のむすまで

○コマカイ石ガ大キナ岩ニナッテ苔ノハエルマデ千年モ万年モ生ラ

○海ノ濱ノ砂ノ数ヲダンダンニカゾヘテ君ノ御長寿ノ年ノ数取リニセウ

千代と八百よ十余年
ちよのこまゆくべうら
ら尺ぜぎりうきを
こそてよろず代と
いふも月ド千万ろ
よ実数と年数と
のひくるーあり
数ぐきうきき砂
もて万ず年ま聖
之

あるの山は熊野の国にあり さしたる
極はなけれども

あるの山さしでは極まりなむ手をうつ君が代は八千世とぞ鳴る

○ホノ山ハ丹ニテ極ニ住デ弁ル千鳥ノ鳴ラキケバ君ガ代ヲ
バヤチヨヽトサ鳴キマス

ホトヽギスハ君ガヤチヨトホトヽギスハ出ヨセヨ

○ワレラガ此長命ナヨヒヲ ソコモトハ進ゼウホトニコレカラコモ
トノ八千世ノヨハヒノ上ヘ ハワレラガ齢モトリソヘテソコモトニ
トメオカレタバ 後ニ名タレガサニテ ホラガ一ヲ名ヒガサ
ツクヤレ おなをよろ〳〵 餘技ヨロ〳〵

仁和ノ比 傳正通 所ホ七年の賀なひ〳〵 肘の歌

あるの山は熊野の国にあり さしたる
極はなけれども

八千世とぞ鳴る

あるの山の仲なるあり代
所のよろ〳〵

あるの山さしでは極まりなむ手をうつ君が代は八千世とぞ鳴る

朕モドウシテナリ 此共ニ長命デ居テ 此度イトホリニ又イク
度モ〳〵賀ヲイハウテ進ゼテ ソコハ千歳賀ニドウゾ逢
ウヤウニシタイ一カナ

仁和のころ〳〵はことにあり〳〵まし〳〵肘は此をだに
八千の賀はまろうなを杖はつくれりとなを彼
此をばよかりてある 傳正通所

神とぞ法祖母あるべし。あの假字を書つまし

ちはやぶる神のきりんはくかゝふ子年の坂もこえぬべしけり

杖はあり〳〵山坂を
とある歌なれば子
年をこゆるとなり

此杖ハ下トホリノ物上ル云又 大カタ神ノ仏キリナサレタ杖デ
アラウノ 然バ此杖ヲツクカラシテハ 千年ノ坂ニデモ 心ヤス
ウ越ラルデアラウトメハル、
ヲノ川のおそいまちぎこの四十賀ノ九條の家にそ
しるる附まゆめる 在原業平朝臣
桜ちりかひ曇れおいくくのこんとゝふなる名まぐふぐゆ
四十ニルナリナサレタレバ 初老トヤシテコレカラ老ガコウトヲヤ
ガドウゾコヌヤウニシタイモノナレバ ソノ老メガ来ルヲヲフミ
マヨフヤウニ其用意ニ桜花ヨタントチリアウテソコラガ
周ウ曇ルヤウニセイ、ソシタラソレデ名ガクラウテ来ル老ガフ
ミマヨウテ来ていボトニ ガ、ハ、万年ふまるまき初ニ疑ひの
ケ、ふあくば、
さぐるまのこゝにたえずのよるぢれ賀を大井みく
あるる日よめる きのこれをう
はやぶるも名和毋みく、をそあるべく、
飛の尾山飛山とる
いふ大井のハこのふ
とを云ふこと
飛の尾山の山のいはをとゝめて落る涙のあるゝ玉ちよれ数ゝを
コノ大井ノ名ハ千年ノ寿カヤ 山ノ名サメデタイ
玉ノ緒ノ数ハ八寿命ノ千年ノ数カヤ
負長皇子ハ清和
天皇子七の皇子

亀山ナレヤ

さゞやすのミこれきさいの云ひの五十の賀さてまろ
ぞ屏風よ掛のをひちるさよ人のをゝ
たるうさかるをよる　義系　屏風

いるづゝふる月日おりるこでをゝたるゝ考ずすくおき
ナンヒナレニタ〻るヒテイン月只　多イヤラスラナイヤラ　何シ庭
ゝバズニウカ〻トシテクラスガ　ヒヤウニ面白イ花ヲ見テク
ラス春ハサキツウ日数ガスクナウゝハル　後村よ考のす
くゝおきよおどろきて　ゝバだるとゝ月日ハ考ゝうゝ

この方実ヨ仕ず
ところ人ありすぎて
屏風かゝハ絵のき
まのミをとそそい
ちふゝふまゝ出
絵をあるゝてよ
むゝいゝ〻ゝこゝあま
りヨ考よくゝうり
てあゝハあきゝゝ
こゝゝあるゝ

ゝざゝ〻ハ枝を折て
冨の中ぎのあゝ左
ヨきたものゝ

たゝ〻ハ孫の学ヒ
ゝゝゝざゝ〻仕のそハ
ヨゝゝざゝ

なゞめておやゆゝそあゝざゝといゝハゝヨゝゝ

ゆくやすのミこれヒヨの賀のうゝゝゝの屏風ヨよ
ミてうきゝゝゆ　きこれつゝゆ考

考ゝれバやゝふまづヨく梅のなをゝゝゝヨ年のかゞゝゝとゝゝ
春ガクレバ代ハ庭ヘヒツバンニサク極ノ花ヲ　君ガ千年ニデノ春
ノ花ガシヒヤトヨ存ジマスル

素性法師

いゝ〻ヨまゝゝきゝのゝゝだハゝゝねゝゝゝ子年のため　若ヨ姿ハ
千年モイキタ人ハ　昔モアツタカナカツタカハシラヌケレ

タトヒ今ノデハサウ云人ハナイニモセヨ千年イキルタメシヲ
君カラハ始メナサルデアラウ
始メテ伝ヘおきてらるゝ系代ハ神ぞあるゝ人ロゞ君のため
吾君ノ百年ノ数ヲドウゾ万年ニデモト　祈テモオキテモ願
ヒマスルコトハ人ノ為ニコソ及バズ　神ガサ　其通リニ成ハカラヒナ
サレウウサ　我君ノタメニ
神ぞあるらんハ方葉よ神ゝあるさんなどあるゝ数ゆく
あるとぶたるゝひおてふふをいふふとゞ考ふいふあるの
ことのくさはあるべく。

伝ヘきことを神ハ
あきゝゝうよあるゝ
めゝんゝとゝとなる
るをこゝろとらゞ君の
ためとゝをおもへバ
神も即用ゞゝ
おゝゝらんてゝ
とゆゝ

義系三百五十年ノ昔ヲ思ヒ出ル

在系あげたる

法ゝあるゝ年の後ハあるゝあくゆあるゝんよあるせたてゝん
鶴亀ハ千年ノヨハヒヲタモツ物ナレド　ソレモクノ千年ノ後ハド
ウアルヤラヒラヌガ　まゝ孫ハ千年ゴザクテモ　ダソレデハ十分ニハ
存ヒテバ　フノウヘモ　ダ存分ニ　ソレウハ無事デオキマセウ
世ニハあるゝ人在系ゝきたるゞとゝいふ
よゝゝねのつねあるゝゞよるゞちのゝさよすすめまゝゝ
のよゝゝ作ゝる　ゝゝゝゝゝゝ

ゝゝ年よりねゝ
りとあゝ世をせ
ゝあやまりて写
ゝゝあゞゝゝ五
八支性玉沙元寒

猶千世と見えたる人
をも寿ぐ貞観十
七年五月十九日従
四位行丹波守
小峯経世卒年七十
五と云人也

万葉子日に
とこしなへて老
せぬ君か千代

万代をまつふく君をいはひつる千年の陰に住(スマ)んおもふ人ぞ

君ハ万年ノ御寿命ヲ待ツテレバ ソノマツト云名ノ松デサヘオイ
ハヒヤレマスル サウシテソノ千年モアル松ノカゲニ鶴ノスムヤウニ
ワタシモ君ノ千年ノオカゲヲ蒙リテ共ニ長ウ居マセウト存ジマ
スレハサ　能材子つるとの御辞に鶴をかくせさうと云へりま
とふ下の句ハよむ鶴子よりかくりさなえさう。

おいしのくくれたまる喜系朝臣の四十賀しける時に
四季の屏風しろの歌風子かきてくりける
春の野につる万代をいはふんたる

とあり
あきみえる絵のさ
まおもはつくたく
元より雪のふり
雪のやうもいひまき
まきまたおもひ
とふ歌きこと」
家隆卿の筆と
云ふによりて名を
筆ぐる帳家の集
あるもいへりて彩在
のことにある

御賀ノタメニカフ春日野デ若菜ヲツミ〳〵心ノ内デ御寿命ヲ
万年モデトオイハヒマス心デ祈ルホドハ 御先祖ノ此春日ノ御神カ
サ御納受ナサレテ御守リナサルデゴザラウ 君がなんのまう
上ふうそうが如し

山高く雲ゐにみゆるさくら花こゝろのゆきてをらぬ日ぞなき

○高イ山デ雲ノアタリニ見エルアノ桜ノ花ガキツウヨイ花ヂヤ
ガ 山ガ高サニドウモアソコヘハエイカヌニヨツテ アノドウゾ一枝折テキ
タイ物ヂヤトヲモウ心カ 毎日アノ山ヘイテアノ桜ヲヨソナガラ日
ハサナイ

夏

めづらしき声のほとゝぎすこゑ聞くこゝろの年をあらたまるこゝろ

○イツノ年モ同ジ声デナケバナニモメヅラシイ声デハナイニ アノ郭公ハオホク年毎年ヅヽモサテモ〜ヨクアカマ丁ヤ

おなじこゝろの詠ぞ

秋

すゝの沼れ松と荻風吹くゝふて衣おりそゝるおきろ寒く

○住江ノ松ヲ秋風ガサアトフクトウ〳〵ド オヽト浪ノ音ヲ

子ゝ多あくさかの川霧立ぬらむ山の末まもなきろめく

佐保山ノ木葉モ段〻色ガマサツテキタ 比ト木リナバ今マデニモ

一 比佐保川ノ霧ガ多クナツタ

○子秋ニ霧の時なのゝ あくず霧かも木

秋ハ色ハ色ハ山よりの紅葉ヲ風ぞかゝ〳〵

○秋ニナツテモ木葉ノ色ガハラヌトハ常磐山ヂヤニヨツテ此

山ニハ紅葉ハナイニヨツ山ノ紅葉ヲ風ガ吹テ来テサ 此年

ハ山ハ惜スワイ

冬

寒ゝ雪ハ少ノ寒く附ハこよりの山下風はるぞちりけふ

延喜式ニ二の皇子保明親王ナリ

○此吉野ノアタリハドコモカモ白イ雪ガツタ時ニハ　山風デ落
ハ花ガサ落ルワイ
来ニケのうちれなてふる附よりてよろ
興付後京極殿の御
呼言き来日の山よいづる日のかうら附ふくてこしぐらかり
○春日神ノ公未ノ後原氏ノ中デモ式上ハモナイ公方ノ姫君ノ腹
ニデキマシナカツタ若君様ナバ　テウドノ春日山ノるウウチハ
レテ鳥ヲ呼ノナイヤウニ公行ホイツデモ　ノモリナウ天下ヲ御
照シアソバスデアラウト存ジラレマス

頭書左ノ和歌集ヲ読美ケ第八
離別部
歌　　在原行平朝臣
立ちわかれいなばの山の峰に生ふる まつとしきかば今かへりこむ
○今ハ式方ハ京ヲ立テ別レテ因幡ヲ下ルガ　其ノ国ノイナバ山ノ
峰ニハエテアル松ノ名ト　ホリニソトタガ式方ヲ待ツト
タテラ　ヂキニヌカヘツテコウワサテ
よミ人しらず
すがるなく　林の萩ふる朝たちて　旅行く人をいつとゝ待ま

文徳実録貞観二年四月後四位下在原朝臣行平為因幡守ニ　ことのあり

すがるハ日本紀ニ蝶ノ羸トヲキ　すがるなくハ蝶ノ羸ヲ
ることよりノ一ハ

我峰とる迄ころ
ろ何とる志ねハ
萩ゆとくつふまき
てハすぐゝハ鹿の
こゑるぐあてゝ
ぬ流をもつり萩
系ハこのろ北萩な
志バをろゝゝのけ
しきとをこ奇の
あやとゝ

○朝立テ旅ヘユク人ニ　一　萩咲テアル武秋ノ野デ今ワカレル

ガ　オカリヲバイツトゴウテ　タウゾ　ソレヤキツウ遠イ

デアラウ　オ仏ゞすぐる幸くの流らけがゝ。

ひぎりおき雲ゐのよるふるるを人をしのはおゝさむやハ

○今カウ別レテ限リモナイ遠イ　雲ヨリアチフノ忘ヘワレハイ

ノチヤガノレデモ　武故郷ノ人ノ事ハ常住忘レルヽモナシニゴウ

テ行ウチヤヨツテ　心内ハドコデモイツシヨニウレダツテイク

モ同ジコチヤワサ　身ヨリカウシテ今別ルレ心ノ内デハ　半弦

タチヲアトヘ残レテオカウカイ　心デハツレダツテイクワサテ

たゝちねハ毋ゝろふ
つき冠詩ゝこゝふお
やとゝつゝハ毋の
ゆまゝんをゝつゝ
ゝゝてう浮世ゝ
とゝうべきをおやゝい
るより好ゝこゝま
るぎやとゝきゝ
ゝゝゝん

おゆ・結句の流いとゝろゝ。餅財ゝろゝ。

をのゝちゝるゝゝちのゝけすけホゝろゝ附ゝ毛

ゝちのゝろ

たゝちゝのおやのまりゝとあひゝるゝ人ゝゝゝハ笑ゝとゝめそ

○ソナタノ身ノ中リチヤトゴウテ　添デヤル武毋ガ心バカリヲバ

ヌカサキノ関所ゝゝデモドウゾトメテ　下サルナ　トホシテヤウ

テ下サレ

さゝゝときのゝこれ家よてふぢゝゝけきようぶゝを江

のすけホゝろゝ附ゝろ附ゝろ多のゝ形むけゝゝろふ

よくあるきのうこゝにて

○今日別レテ明日ハギキヲアハルルホド近イ近江ノ国ヤトハ心ヘ

カハツタモノデ別レトイヘバ悲シイ　ア夜ガイカウフケタヤラ　袖ガ寒ウデヌレタワイ　イヤ〳〵コレヤ　涙ヂヤワイ

おゝ〳〵まゐりなさるこゝまでつれ〳〵なる

○此ホトニハカヘル山トヲ山ガアルトヲ聞ナレバ其名ヲトホリニオツケノ山無事デカヘラウシヤラウトハ思ヘドソレデアノ霞

ノ立テアル方ヘ立テ別レテイカレヤツタナラバ寒ウレカラウ人のこゝまれたるむけあるくあるきれ法こゝまき

○ナゴリヲシウ思ヘバ　ヌダツシヤラヌウチカラ　ヤウ〳〵悪イ物ヲ

三　ヲテイカレヤツタアトデハ　ドヤウナコヂガスルデアラウ

とるだちの人は思ヘおくれるよあるこゝ

在系者げたる

ろうれてハるどとへぐろとゐぢやうつれおぐ〳〵ふうねて寒さき

るやう〳〵あるべ

これもあの〳〵乗ハ三

とゐもん冠のこゝ

四のゐ山所ハ三

ろうれるべとえ〳〵

や

おやとハよまるふ

ゆく〳〵ばうねて寒

○別レテカラハ、まいにちヲ（ダテ）、久シウアハレヌコヂヤガトオ
ウユエカシテ　マダカウシテ見テ居ナガラ　カタニ方デハ　ハヤ人ラ
カラモウ哀シウ思ハル、

あづまのくさ（まろうどる人よりてつかはしける

いとこのあつやき

思ヘバ　ゴロ　ヲ　ヒロ　ネバ　ヒル　ヒト　ヌル　ヲ　ヒル　ヒタ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ　ヒ

○ナンバウカナゴリヲレウ思ヘバ　人ノ身ハ二ツニ分ラレヌ物デ
ドウモツイテハエイカナバ　目ニハ見エヌケレド　心ヲサ　其方
ヘソハセテヤリ　ス

お坂の屋ウノ末のかをあづまのかとゝ

ゴロ　ヒロ　ヒロ　ヒ

ことのつるまるふもだ　・子孫云　祭礼初八日と二日行なゆ
づくて二三の日を後これども関よく
人をこぞれ〳〵人事のとゝ行くをおくしき
ものあるべきまで〳〵ものらるべきまあべ

歌〳〵ら尺　よき人あるべず

かゝる衣ども日八まろ〻朝夢のおきて〳〵ゆびけぬぎ物を

○一　ロ五チ日ヲバ明日ヂヤトラフハ　ワレヤモウ学キマスイ
ワレヲバステオイデロ出ナサルナラバ　明日ロ五ヂヤト学
天　明日ノ朝ニナツテナラ　ワレヤモウ夢ノキエルヤウニアラウ
ト存ジマスモノ

はるのハあるゝ人ほろさをあつてあくゝ〳〵きめ

ふつきて年つゝすきゝ〳〵るゝ人をすてたゞ明
日あんらとゞりらつゝゝ〳〵射よとらうもい
たゞよゝてつゝ〳〵る

○　ひちつ人まかり〳〵る射よあぢ〳〵のきゝとう〳〵ふよ
ゝてつゝ〳〵る　霧

あきあげふゝべきゝ〳〵ゝ教まゝばゝひちぬゝてき拉ゝり
○　毎アハレハ公利（キミトシ）掠ヂヤトハ教マレヌ　ミヅク弁イ心ナレバ
ソレヱワレヤ存ジ立ツテノ考陸（ヒタチ）ヘ下リマスル今度ノ旅デコ
サリマス

是ハ考陸ノ名ヲ考陸ノ名ヲ
ヲトヨミ入ゝること
詞ヒロフ　ゝ　ゝ
の名他諸ゝの名ハ
ゝきを彼ゝ衣
きろ〻列ゝの分
を移の部ヨ入ゝ
是もさゝるこゝて前
をかゝゝてこゝ

まハ入りこ
人の家よりやうハ家
ゑ人のこゝろよりやく
まてるあるべし

これハ家の秘よ入べ
きよりくハ法をよ
あるをてこゝよ入
こゝろよや

きのむねさぶあづまへまゐる舟より人の家
よりやうてあるつきゝ出ろとくまゐりまゐる
おゝれば女のよこていぐそりゐる

よこへ入りこぐ

元を忘れぬ今ゐ人よ命あるべ家や忘ゝ家やとゐぬと

○オマヘハワタレヲイツデモ忘レハセヌトオツシヤルケレモ ワレハドウモソレハサ 一 エガテンセヌ 未デワレガ忘レルカ オマヘガ忘レテドウデトサレヌカハ 命ガアツテイキテ居タナラ オツシヤ ツケ知レウホドニタメレテゴラウジヨ ワレハオマヘヲイツデモウスレハスマイカ オマヘハ追付ワタレヲバ忘レナサルデアラウ

ワサ

あひおゝて付ゐる人のあづまへまゐる
とおゝてゐるとゝくよあゐ ぬゐやぶ
モあゐ人面ふんのおゝるれバゐゐとゝ人よ人あゐゐれを
○半兵ガ今度ドレホドキイ呼ヘイカシヤツテモ 拙者忍
ハイツモワ半兵ノ方ヘカヨウテ コヽ 三 ニ残ツテ居ネバ ヒツキヤ
ウ過身ガ 今ハ別レテアト上残ルトヲ見ラレルバカリヂヤ 心ハ別レ
ハセヌ

ゐ作まハ二の日ゐう
きゐゐのとあゐ
あゐきれ

友のあづまへまかりくる所よまる

よをそむけひでさと

帝のこうさうれさホミをあまんをぬさどくぐく孫くるか

○雪ノアチコチヘ分レテイクヤウニ今度ハ手イタダヲヘダテく

別レル悲シサニ今ハナムケニ進ズル時ノ手向ノ麻ノコマカナヤウ

ニ拙者ハイロ〳〵ニ心ヲダイテ サワ〳〵ヲレイ品様ニデゴザ

ルワカナ。イ様ニぬさとて。五色の絹ぬぎとこまろはきろ

て袋ニいれく。乃の神ニまもらの神ニ孫ざ

つんをそえたまへり。

ぬさ袋くいつくられる。

こちのクニヘまろうをくる人によきてつろ〳〵くる

こゝやもつとおぼえよう

ホもこゝらの国とう

くるハそのぬのあ

り言ヨよろ〳〵く

す是ふこちのおく

の国ところにおく

の松を者きてこちの

の国くのくるこゝ

ちの心として八ホま

ア者きこそあや

まれくこ

ちくのきの

○ハルカニ雲ノイクヘモヘダツテアルアチラノ山テアラウ所 拙者

ハ雲ノ手ヲタエズ山ウテ居ヤウホドニ タトヒ雲ハヘダテル

所 心ハヘダテサツシヤルナヤ

人をころれくる所よりくる

ろうれてふと八色ホもあくまんをうこそとびくくくん

○色コヘ物ニシム拙ナレ 別レトヲイハ色デモナイニ ドウヲコトデ

ハヤウニ心ニシミ〳〵トツラウヘルヤラ

この国越前とのとこるとこるハのかの比羽山あれバし

あひまれくらるへのこれ出まゝうして年ゝて来
ゝまうできゝ又うゝる時よまある

九月内能恒

ゆゝる山ゝまゝ有てあるひハまそもまゝみ名よこそ
ありけれ

○さて扨ノ又下ダリくヽヰル山ハ山ハ ヨノヘイタ人ノカル上云
名ギヤトゝウタニ ツカヘル山ハ 何ンヤウニタツコゾ サウ云山
ガ有テモアルカヒハナイ アルカヒトハ 久レブリデ来テモ
来ハ居上マラズニ 又アチヘカヘル上云名デコソアレ

この国へまゝうゝる人よゝてつゝ〜ゝる

ゝる山ハ越ゝまゝ

よゝそふのゝこひやゝゝゝん山のやゝ九ゝぶくちあゝゝ多人

○今カラハヨソニバッカリ オナッカヒウ名ウテ 月日ヲタテル
デヨザラウカ アノハウヘ来テル目ニカラヒウ名ハレメロレ
ガ身ナバ やゝゝ九ゝとゝゝるを白山の雪を見ゝる
とゝひろけたり

おくた山のそとうゝゝ人をゝゝゝゝくよある

つゝやき

おくハ山こゝゝ〜ゝゝて射る矢ゝゝを惜むゝゝ〜ゝ
○コイオトハ山ゝゝる イ木ノ上デアレキトギスガゝるウゝゝキマス

比ゝゝれとゝゝのとゝ
むゝゝゝ〜ゝゝゝたゝ
ゝゝゝ〜ゝゝとゝてさゝ
我ゝ〜むゝよゝゝを
アの声ゝひゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝハゝゝで射ゝゝ
のゝゝゝゝゝゝゝゝ

〇郭公モアイトホリ呼テ手紙ノ別レヲナゴリヲレウ名ウテ
アラウサウ文エル　拙者トモ日シフサ
唐モノレベ級ニ作対ラレテ西王へ
ぢちくのちらげぐ名ものつひ月ぐ月乃
つごとり名ふまくりくるまくのあれごとも
さけたうびくるつぐふある
ぢちくのかねうち
ゆるくるふ呼てとぐめよきぐ〻秋のあれハ惜くやあもぬ
〇上もぐ〻呼テドウゾオトメヤセキリぐスヨ　今ハ秋ノ別レノ
時分ニオワカレヤスハ　コレホドナゴリヲレイニソチハナゴリヲ

（ハのさきゝ氏ゝゝを
ゆひえあ人ハうの
表をハゝゝゝゝぬや
くゝよあつ

ゆく秋のつゝれを
をゝむハ人のあ
ゝゝゝむをうねて
ゝゝ

シウハナイカイ

平めとのり

秋ぞのゝゝゝゝ立出てあれあバれれぬるひまこひやゝゝくゝん
〇アノ秋ノ立ツヤウニ平ら拙モ共ニ立テ出テイカレヤッテ別レヤダ
ナラ　ワレハ今カラハアノ秋ノハレヌヤウニ　ビガハレヌ　イツモオナカ
シウ名ウテタテルデゴザラウカイ
ゆゆさねぐ活くゝ〻ゆあくゝん　とくゝまくりくる肘まや
まぐきゆくゝくゝあゝ　をくゝくくるゝくゝくゝある

ゑろめ

ゑろめハ大和ゆ
くりよゆの若ぐむ
すゆ又ハ玉ロ
北進女ありくゝ

命ぜふんようあふれあふばかりのかなしみ

○命サヘマカセテツテ死ナズ居ラルヘモナラ ナニガサテハ別レヤスガコレホドニ悲シカラウヅイ 人ノ命ハ帰リノ時分マデノコトモ知レヌニヨツテサ 悲シイマイノ

山さきより神るびのをりまでおくりふんまつり

てうりがくよしてあれをこころるまよあるこまかとのさね

人やりのたまあくれくふたらこハいきしとらひてぞ傷りをん

○人ナセル様デハナイ系ノカライク様ヂヤニ タイガイナコナ

おくりの人ことこまふとりあるこまとまれり

ラモウイキトモナイトステドレヤカラウヅ

いまこれよりかりねとさねどのひるをとりまよこ

るる 後系ろねかち

ちくられてきふんのあるあれバうくるまあよハたもちくれず

○ドコマデモイツヨニイキタイトシタハレテコレマデキタ心ニ著テアル我身ヂヤニソノ人ガドコマデモ我ニツキウウテノ系レバコレカラ後ルトキニハ此身ハ心トハナレテ心ナイヌデカラヂヤニヨツテ カヘリシナニハたもエシリセヌ

後系これとぐむさくのすけまろうるる附まれ

ろくはやろのあるよりくだりてあること
ハあるとと別のあるニ
到るなり

うつまお坂をこゆることくまくらの

法こゆき

○此坂ハ達坂ナレバ人ニ達ウズチヤニ 此坂ヲコエツソレテハア別レ
テイカシヤルーカ コレデハ達坂トエ名ハ 彩モシレサウニ思エニ
彩ニテラヌサ名キヤヤイノ コガ人タノメトエモノギヤ 人ダメト
ハ人ニ彩モシレウ名ハセテオイテ ソレテ其通リデモナウテム
ダチ事ヲエモマス

。千枝ニ。うろとハ。達坂をこえ。ぐ。うろと
れやくうということゆく。をとあくこ
とまぐうとよ
いうことぐあり。

おろえのちふるぐちへ入ろうとあのちふむ
ルようあろ 後系ろねすみの親ニ
ろぐ彩ろーの右ろ山ろねぐるやきれまり路ハヲあねん
○ま彩イトラツシヤルルぬ人ハ我者ハ不案内ナレバ 白山ハモ
トヨリイイ 恐体雪ノ深イぬチヤトエコナレバ ま彩イトホ
ツテイカツシヤツタツ雪ノ跡ヲタヅナテ拵者モアトカラ系
ラウ
人の右山ようまできくタようつくツ系ウ
とーくろ付ようあろ 偽正直能

仕官の人ハ彩ま彩
ぐくきあるようのう
時ようのぐくそひ
ろくようくあるこ

右山ハこれこの東
の山科ふく遍照
のうこうを住ルーニ
とよをようう
ちのれハエ寺ちう
とうつ

[illegible]

タケルの蘭ハ山トヨメバ[illegible]

○タカタケト庭ヤガキハ山トヨエレバヨイニ サウシテタチフ夜ルハドウモ山ハコエラレマイトオウテ アイイヌノ人モ コヨヒハコデトマルヤウニ

山よのぎりてうりまうできてくるぶるるる法の
でふあるる　西仙法師

コめれとバ山の拘よ海ろせくんとめんと光ドハなのまみ〜

○サテカウ仏別レヤスキツウ仏残念ナガ トラテ拘僧ガナンボオトメヤレタテトマリハナサレイホドニ コレハナンデモコノ

[illegible]

比叡の山の今利舎
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ヤウニ

ことばかゝバ君と多くぶくふるハるんゝ仏ハ花のゝ死さやハあゝぬ

仙法師

○一トテモ見ルヿニゝゝボドナラバ　君ゝ残リ多ウ名ヲテ才上リ十九

ヤウニゝゝイタガヨイ　ソレニ君ヲオカヘシヤスハ花イキコエヌノデハ

ナイカ　花ノキコエヌノデヤウサオカヘシヤサウヤウハナイワサテ

結句又　花ヨンデガタメニモウイフデハナイカ　ソチガタメニモウ

イフデヤウサテ

仁和のゝぶぐみこふおそ〜すゝる附さやゝの

新さ遍照の里ゝ

ゝとゝゝゝ内ゝ

度ゝゝ

滝乃らんぐふおそ〜ゆ〜てゝゝりみひゝゝゝふよゝる

蕉翁法師

あゝぐゝてゝゝゝ滝（ナミダ）くきふそふゝゝゝゝとやトハゝゝゆらゝゝ

○イコリ多ウテ心別レヤス　拘伽ガ此涙ガ滝ニソウテ流レル

コレデハ川下デハ　水ガゝシタトゝエルデガアラウ

ゝゝゝゝ

あり

林萩のもとばゆるやかぬるあをばかりてをりとこそ聞へ

○アノ萩ノ花ヲコノ雨ニヌラレテノレヲラカレテシマウハ　キツリ惜ウゴヒマスレドモ一ダンレヨリモ孫ノ代雨ニヌレテ心殘リナサルニハ別レヤスノガサ　ナホサラ心名殘ヲシイコヂヤト存ジラレマスワイノ　マアヒトシアカリニセ　ソノウチニ函モヤミニセウワサテ

とあり

ゆるゆるとうへ　兼好

とゝむとゝん人のゝをゆるゆるあふ林のもとゝれとゝ身ぞありふける

○ソノヤウニ別レテ惜ンデ拵者ヲ心涙切ニゴウテ下サレウト人今日ニデ子タミモ存ゼナンダ　サウレタ孫ノ心志ヲマダ存ゼ

ナンダウチニ拵者ガ身ハ　此秋ノ時雨ノフルトヒヤウニ春ウチノツテモウラチノアカヌ物ニナリマシタ一ツソト早ウ若イウチニ孫ノ志ヲ知ツタラ　別シテ大事ニゴザラウニアノ殘念ナ

ツねのおやきミふたゝびめてねぐらもとくふれ心

ワカ

ふるゆきに　足代

ふるれどうれしくもあるかこのあひだ雪かなさきふ何と言まく

○心ヤスヤスハナゴリヲレウハアレド　サノノアノ姫レイコカナ　ナゼニトヤスニ今夜ヨリサキ　イマダ心近付キニナラナンダウチニハ　何ヲオナツカレウハ心ヒマセウゾ　今夜始メテ心近付ニナリテシタレ

ゑ〜書よ初めてとあるをよくむ久〜カタ〜

バコソ　乃別レヤスナレ　スレヤ別レノ去ゴリヲスルウ名ハレヤリ云ヒ
近ヤニテツタ所ガ　ナボウカ姑レイフヂヤ　ヤ井テ

歌ヽ　よこ人ヽ

あづまにて君の袖の名ゝ玉ハ君ゞ形見とつゝみてぞかく

○　ムリ多ウテ別レル袖ノ涙ハトンヽト玉ヤウニ落ガ此玉ヲバ　ソコモトノ形見ヂヤト存ジテ即チ此袖ニツヽンデサキルクギリ　ヤ　ク　ヤ　ク　ヤ　ク

迷フテエカヌホド千ツテクレイ

ちぐの山こえんみくいーみのりとゆておいひろ
のろられるとりまある

ほくやき

むくぶきの ちぐてよ 濁る山の井れあてもへよ ぬれぬろれ

○ 拔体コイウチ山ノシミヅハ 浅イモノヂヤニヨツテ 飲ウト
ゴウテスクヘバソノ手カラ落ルシヅクデ ヂキニ濁ルニヨツテ
オモウヤウニスクウテノムヽヌ 飲タラヌモノヂヤガ ニウド
ソノ通リニ サテ〳〵マア 残リオホイニアノ人ニウカレタコ

トカナ

乃ますあてりろろ人のくろるまれを いひつきく
ロられるところよそよそる

ときのり

下の第ハ七ちハクろ〳〵ロろるもヌ形ろぐりてもを人ぐぐ
○ 帶ラスルニ ウ白ヘアテタ所デハ 端ノタタ西方ヘワカレル
ケ毛 前ヘマハシテムスブトコロデハ ヌイキアウモノヂヤ
ガ ソノ通リニ今ライクヲハカウベツ〳〵ニワカレテイクトモ
マタソノウチドウシテチリトモ 出合ウワサテ

ひいひつきてハハ〳〵
てろの車よりの
をいろる

下の第ハ形来束の
下よ来ぐるものく
紙をミツカヘ〳〵まを
紙ろうよりくをアイ
ようそこれ方をぐ
てくて下の第ろとろ
るくぐ〳〵隔句体ノ

頭書古今和歌集圭蒐巻中

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan